広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	Port-Royalの成立過程 : その一
Author(s)	岡部, 喬
Citation	フランス文学 , 8 : 34 - 41
Issue Date	1966-07-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040876
Right	
Relation	

Port-Royal の成立過程

——その一——

岡　部　　喬

Port-Royal 六巻は，周知の如く Sainte-Beuve の円熟期の作品で，その豊富な題材と彼の批評に於ける Portrait 形式の完成から，宛らこの僧院に繋る人々の galerie の観をなしている．そしてこれだけの大著の完成には，多くの動機から発足して，多年の歳月をかけて，Sainte-Beuve が他の仕事と併行しながら，その稿の初版後にも改訂を繰返して行なっただけに，Port-Royal は約二十年の成立過程をもっている．私がここで論じようとするのは，この書の言わば外面的な成立史であつて，Sainte-Beuve が Port-Royal に着手した外的動因と内面的動機を出来る限り闡明にすることを第一の主眼点として，この決定版に至る迄の歴史を以下に述べることにする．

I.

Port-Royal の成立史の発端は，1837 年 11 月から翌年の 5 月に至る迄の Lausanne の Académie で Sainte-Beuve が招聘されて行なった講義から始る．Sainte-Beuve はその間の事情を，初版の序文の中で次の様に説明している．

「1837年の夏，スイスを旅行中，この偉大な国の自然が壮厳な趣きの中に，人の心に起させる詩的感動と刻一刻の幸福感に浸りながら，それと共に私はずっと以前から胸中に抱き，その輪郭はすでに出来かかっていた一つの歴史をもっと気長に時間をかけて完成しようと夢見たのです．私は或る日のこと，この計画をふと話題にしたことがありました．只それは，自分の胸中を打明け，それへの障害になっているものについて，少々不満を述べる以外に他意はなかったのであります．併し相手の友人達はいい加減に聞き流す人々ではありませんでした．この言葉は採り入れられ，余所の土地に運ばれて，未知の友人達にも同様に厚遇を受け，私に有利な方向で実を結び，そして再び熟れきった，嬉しい姿をして私の許に帰って来たのです．私に Lausanne の Académie で Port-Royal の講義を行なう名誉ある提案はそのようにして生れたのであります．」〔註 1〕

この文中で Sainte-Beuve が挙げている複数の友人達〔des amis〕とは，対象を曖昧にするためで，事実は単数の友人，詩人で歴史学の教授であった Juste Olivier〔1807年，スイスの Vaud に生れる〕のことである．Sainte-Beuve より三つ年下の Olivier は，1830年の春に，当時 Neuchâtel の Académie で教授職に就いていて，半年間の休暇をとってパリに来遊した．彼は Émile Deschamps, Vigny, Hugo, Musset 等著名の文士達を訪問した後で，Sainte-Beuve を訪ねた．この時，厚遇を受けた Olivier は Sainte-Beuve の身振り，背恰好，

室内の模様等について，興味深い報告を残している．〔註2〕

この様にして結ばれた二人の交友関係はその後も続けられた．そして Sainte-Beuve が1837年に愛する《Adèle Hugo》を忘れるためにスイスを旅行した際，Olivier は女流詩人の妻と共に，別荘に彼を招待し例の件〔註3〕について訊ねた．Olivier は Sainte-Beuve の意中を汲んで，スイスの参事院と文部省に縁故をたどって奔走した．初めの頃は Sainte-Beuve もスイスに滞在中の Cousin の妨害を予想して多少の危惧を感じていた様である．彼の不安の念は1837年5月25日の Olivier 宛の書簡の中に現われている．〔註4〕

Sainte-Beuve の不安は幸いにも徒労に終った．彼は10月20日，Port-Royal に関する文献を携えて Lausanne に到着した．そして半ケ月後の11月6日，彼は開講の辞を述べた．それは1ケ月後の12月15日の Revue des Deux Mondes に掲載されている．

Sainte-Beuve がスイス政府から支給された金額は 3.000 fr. で，当時の教授給与の1.5倍を超過するもので十分な待遇を得たと言えよう．彼は契約により1週3時間の講義を7・8ケ月間担当する義務を背負った．講義は教会堂と隣接した大講堂で行なわれた．受講者は冬に入ると300名を越えたが，春になると恒例の如く減少して行った．Sainte-Beuve は5月31日に81回を以って彼の講義を完了し．6月初旬に帰還した．講義時間は月・火・水曜日の3時から4時まで行なわれた．Sainte-Beuve より5日前に別の講座の教授として着任していた Vinet も殆んど毎日出席し，Olivier も受講者の中に混じっていた．Sainte-Beuve は興奮して顔を外套の中に埋め，口調は訥々として聴衆を短時日のうちに惹きつけることは出来なかったと伝えられている．彼は冒頭から，Port-Royal の序文の中で暗示されているよりも遙かに強い反感に打勝たなければならなかった，

「真剣味のこもった好意が私の心を初めからとらえ，終りまで私を支えてくれました．私がこの好意を全員挙ってのものであると思っている様子を見せたら，私は余りにも単純な人間であります．どこでも全員一致は得られるものではありません．併し，私がこの好意を全員挙ってでないと思えば忘恩者となりましょう」．〔註5〕

要するに聴講者は，講義の内容・表現方法に批判を加え，もっと派手なものを要求した．これに加えて，反対派は彼の Picardie 訛りを嘲笑するのであった．

斯うした厄介な聴衆を前にして，Sainte-Beuve は彼等を強引に屈服させる資質をもっていなかったことを認めておかねばならない．彼は生来雄弁家ではなかったので，講義内容は予めノートに筆記しておいたのである．これについて，友人 Collombet に宛てて，1837年12月24日付の書簡の中で彼は次の様に説明している．「私は自分の講義をすべて書いておきます．それでいて即興講義もします．と言うよりもノートを前において即興を混じえるのです．私はノートの意味と大要だけを逐っているのです．併しながら，すべてのものが書き認されているので，書物を作成する時に，決定版に至らずとも，素材の面では予め得をしていることになります．」〔註6〕

上の手紙から受ける印象では，Sainte-Beuve が如何にもよどみなく弁じているかに感じられるが，事実は講義の草稿をわずかに外れることがある程度で，Olivier の伝える所によ

ると，講義中に即興的に何かを付加することがあっても，彼はそれを帰宅後入念にノートしていたのである．

彼に対する Lausanne 市の人々の反対は講義以外にも仲々峻烈であった．政治的な紛争に彼の「Port-Royal」が利用された為である．当時野党として相当な勢力を獲得していた le Parti libre penseur が宗教的な与党に対して，Sainte-Beuve を講師に迎えて，この主題を押し附けたと云う非難を放った．「Port-Royal」を許可したことが政府の弱味となり，意外な程に事態が進展して，当局も暫くの間混乱した．この地方の新聞はこれを問題としてとりあげて，いくつかの記事を載せた．その中の一つは G. Michaut の Avant les Lundis の中に収められている．「註7」Olivier は回想記の中で，Sainte-Beuve は自分を支持してくれる人達が若干数でもいたので，こうした妨害を意に介していなかったと伝えている．ともかく，彼はその才覚と誠意によって，徐々に聴講者から好評を得ることに成功した．Lausanne での彼の生活はまるで僧侶の如く慎ましく，規律正しいものであった．余暇はすべて講義の準備にあてられ，夜は深更に及ぶことも再三であった．彼は草稿を認める為に，長い時間を費して山と積まれた研究書を渉猟しなければならなかった．その上，不慣れな講壇に立って弁ずることが，彼を最も疲労させた．後年，彼は「そのために悲鳴をあげた」と述懐している．

彼は Lausanne では Olivier 夫妻の家に寝泊りして，家族の一員となっていたが，やがて仕事の進行を妨げられないために，もう一つの住居を得なければならないと考えるようになった．彼は L'Hôtel d'Angleterre に一室をとり，午前中は準備をし，午後には Olivier の家に出向き，又とない親友として愛想よく振舞い，子供達を可愛がっていた．三学期に入ると，Olivier から提案されていた生活費の共同出費に同意さえするようになった．〔註8〕併しながら，Sainte-Beuve が他の愛情関係で失敗している様に中途で少しづつ崩れていった．Olivier は Lausanne における Sainte-Beuve の生活を〔註8〕の様に描いている．

講義も半ばを過ぎると，その準備から来る疲労が身体に感じられて来た．彼は1月25日付の Collombet に宛てた手紙の中で「私は耕作のために，休みなく繋がれたままである．私は畝の数をかぞえる，既に耕したものと未だ残っている分とを」〔註10〕彼は6月初旬に Lausanne での義務を了えて，気分も晴々と Paris に帰って来た．彼はすぐにも原稿を印刷に付すことも出来たが，もう一度再検討せずにはいられなかった．所で，再び Paris の散慢な生活に逆戻りした事と，日々の糧である評論記事の執筆という二重の障害のために，規則正しくこの仕事にかかり切りにはなれなかった．1840年4月になって，Port-Royal 第一巻が漸く Renduel から出版された．そして1842年に第二巻が同じく Renduel から，1848年に第三巻が Hachette から，それぞれ先に発表された書巻の正誤表付で出版された．

Sainte-Beuve は初め八折判で四巻本を予定していたのであるが，素材が当初の枠を越えたので，1859年に Hachette から最後の二巻を追加して出版した．翌1860年には特に最初の三巻に加筆した改訂第二版が出版された．更に1867年に大幅に改訂増補された十八折三十六ページ型の六巻を決定版として出版した．これは Maxime Leroy の Pléiade 版が現わ

れる迄は一般に底本として採用されていたものである.

II.

以上の事柄を述べた後で，今度はこの Port-Royal の書物と Lausanne の講義との間の関係を究めなければならない.

Sainte-Beuve がこの大作について，いつ頃から構想を懐くようになったのであろうか. 書簡集の中で彼が Port-Royal のことに触れている最初の手紙は，1834年12月14日の日付の Lamennais 宛に出されたものである.「今年は Port-Royal の文学史に着手します. それは実に素晴らしい主題であって，その範囲は限られているが広汎でもあり，十七世紀のすべてに沿って進み，又，それと交わり，幾度もその最も美しい部分を成しています. 敬服すべき人々が並んでいます. Pascal, Arnauld, Nicole, その他に大勢，彼等ほど人に知られていないが，心惹かれる人達，Lancelot, Hamon など. 私はこの主題にいつまでもはかどらぬままにいたら，又，専ら全うすることを願っている仕事を放置せしめるような避け難い事態がこれから先に起きて，中途で散慢にならぬよう祈っています.」〔註11〕

それから数日おいて，彼は Ampère に次の手紙を送っている.「私は Port-Royal の研究と隠者達にすっかりとりくみました. それは私の能力の及び得る一種の Roma です. 私は貴方が Vatican を崇拝すると同じ位，もう心をよせています.」

更に1835年2月1日には，竹馬の友 l'abbé Barbe に宛て,「僕は今，Port-Royal の文学史とそれにつながる隠者達のことを研究している. それは17世紀の文学史の中で美しい部分です，Racine, Despréaux まで，Mme de Sévigné を若干加えれば，そして又，矛盾しているようで事実は jansénisme と関係のあった Bossuet や Fénelon のことを折にふれて語れば，恐らく最も美しい部分となります. 年末には，この仕事が進捗していることを期待しています. 尤も，他の仕事のために妨げられて，気が入らないことが度々ですが.」

以上挙げた書簡から明らかなことは，Sainte-Beuve が Port-Royal に惹きつけられたのは文学的な方面からであった. 彼がその計画を Lamennais や l'abbé Barbe ら宗教人に打明けているときにも，自分の行なおうとしている研究を，本質的に文学史と考えていることである. そこには周囲の事情がそれを強いている面がある. 次にその点を明確にして見よう.

1833年に，Sainte-Beuve は友人 Lerminier から Collège de France の教授か代理教授に立候補してはどうかと勧められた. Sainte-Beuve は文学者としての自由と余暇を，又政治的な自由を失ないたくないために返事を渋った. 併しながら，Lerminier の勧誘は，ジャーナリストが誰でも味わう不安定な収入と新聞社の要請に従わねばならぬと云う二重苦を遁れたいと云う彼の欲求を煽った. 他方，Récamier 夫人のサロンの常連からも応援されて，1834年に彼は École normale の講師の職を得ようと奔走した. 時の大臣 Guizot は Ampère を École normale に残しておきたかったので，初めの頃は耳をかさず，他の地位なら何とかしようと答えた. そのうち Guizot の方から折れて出て,「その年，もしも私が

彼に対して証拠となるような一巻の書物，大学の聴講生に示す証拠書類を作成すれば，彼は多分間違いなく私を任命すべく配慮しようと……」〔註14〕

この目論見は成功しなかった．しかしこれが機縁となって，彼の内部に教授職への期待とそれがために，彼のもっている技能，思想，経験のすべてを投入した，所謂彼のすべてをかけた正真正銘の傑作を書く執念が湧いてきた．丁度その頃 Port-Royal の構想が Sainte-Beuve の内部で判っきりとした形をとってきた．従って Port-Royal が彼にとって博士論文と云う形の下に現われたのは不思議ではない．

しかし，Sainte-Beuve のケースではいつでもそうであるが，彼と云う複雑な人間を考慮して余りに単純な枠におさめようとすることは警戒しなければならない．彼の Port-Royal はその後いろんな要素を吸収して大きく脹れて行くのであるから，たとえ最初は純文学的な意図から Port-Royal を手がけたことが確証されても，他にも彼の興味を惹く主題が多くあったにも拘らず，何故彼が特にこの Port-Royal を選んだかと云う問題が残っている．

Léon Séché は彼の当時の心境の中には jansénisme 的要素を到る所に見出し，Sainte-Beuve は他の主題を選び得なかったと極限しているが，我々はそこまでは信じ得ないとしても，次の事は認め得ると思われる．即ち，久しい間フランスに存続していた janséniste の伝統がまだ残存していて，Sainte-Beuve がその影響を受けていたことは確かである．何故なら，彼は限りない変貌をとげて行くのであるが，Port-Royal は幾度もいろんな形をとって彼の内部に現われ，親しみ深いものであった．更に押し進めて，次の事も確かな事実と認め得られるであろう．即ち Port-Royal の精神と Sainte-Beuve の習癖・感受性の間には或る種の類似点，換言すれば先天的な相性のよさが存在していて親和力が出来上っていたとみられる．Sainte-Beuve は幼時から深い悲哀感を抱いていた為に，jansénistes の魂の奥底に宿している永遠に喪に服した様な暗い翳をよく理解し得たものと思われる．その事を如実に表している彼の感想文を次に引用して，この論を終ることにする．

「カトリック的想像力（信仰の基礎とは関係のない）を持った人達がいる．たとえば，Chateaubriand や Fontanes がこの部類である．礼拝の壮麗や，祭典の華麗や，讃美歌の諧調や，儀式の端正や，香など，こういうものの総てが彼らを感動させ，昂奮させる．――また，キリスト教的感受性というもの（理性は別として）を持った別の部類の人達がいる．僕などが，この仲間の一人である．控え目な生活や，曇った空や，幾らかの禁慾や，冥想孤独の習慣など，こういうものの総てが僕の心に忍び込んで，僕を感動させ，思わずも信仰したいような気持にさせる．」

〔注〕

(1) Voyageant en Suisse, durant l'été de 1837, au milieu des émotions poétiques et de ce bonheur de chaque moment que suscite à l'âme la nature de ce grand pays dans sa magnificence, j'y rêvais aussi de plus longs loisirs pour achever une histoire depuis longtemps méditée et déjà ébauchée. J'en parlais un jour au hasard, sans autre but que de m'épancher et de me plaindre un peu des obstacles; mais j'en parlais à des amis

en qui nulle parole ne tombe vainement. Ce mot recueilli, porté ailleurs, également agréé et favorisé par d'autres amis inconnus, fructifia à mon avantage, et me **revint tout muri et** sous une forme bien flatteuse. Il en résulta l'honorable proposition qui me fut faite d'un cours à professer sur Port-Royal à l'Académie de Lausanne. (Port-Royal, Préface de la première édition, Bibliothèque de la Pléiade, t. 1, p 89-90)

(2) M. Sainte-Beuve, n'achève pas toujours ses phrases; je ne dirai pas qu'il les bredouille, mais il les jette, et il a l'air d'un être dégoûté et de n'y plus tenir déjà avant qu'elles soient achevées. Cela donne à sa conversation un caractère sautillant. Sa voix est assez forte; il appuie sur certaines syllabes, sur certains mots.

Quant à son extérieur, j'ajouterai, pour les personnes qui ne l'ont jamais vu, que sa taille est moyenne et sa figure peu régulière. Sa tête, pâle, ronde, est presque trop grosse pour son corps. Le nez grand, mais mal fait; les yeux bleus, lucides et d'une grandeur variable, semblent s'ouvrir quelquefois davantage. Les cheveux, rouges blonds, très abondants, sont à la fois raides et fins. En somme, M. Sainte-Beuve n'est pas beau, pas même bien; toutefois, sa figure n'a rien de désagréable et finit même par plaire. Il était mis simplement, cependant bien. Redingote verte, gilet de soie, pantalon d'été. La chambre m'a frappé. Il était derrière un paravent dans un petit enclos qui renfermait deux tables chargées de livres, de journaux, de papiers. Son lit était à côté. Ceux qui ont vu Sainte-Beuve pendant ses dernières années n'auront pas de peine à se représenter ce petit enclos de travail où il m'apparut déjà dans sa jeunesse, et qu'à travers des habitudes et des positions diverses, il conserva jusqu'à la fin. (Souvenirs d'Olivier sur Sainte-Beuve; Notice biographique et littéraire sur Juste Olivier, par Eugène Rambert. p. 7-10)

(3) (Vous avez plusieurs chaires de littérature en Suisse ? me dit-il encore dans le cours de la conversation. —— Oh ! pas beaucoup. Il n'y en a que trois dans la Suisse française. Et puis, il y en a une, française aussi, à Bâle; elle est occupée par M. Vinet. ——Oui, l'auteur d'un ouvrage sur la liberté des cultes. Il y a de belles choses dans son livre.) (Juste Olivier, op. cit., p. 29-30).

(4) Je me suis plus que jamais dirigé vers vous de toutes mes pensées et de tous mes désirs; c'est au point que j'irais même quand le Conseil n'approuverait pas. Vous avez, en ce moment, en Suisse, un de nos amis voyageurs que je redoute un peu: Cousin. Si on l'écoute, il me nuira, quoique ami. Mais c'est un des amis d'ici, voyez-vous. Il me louera de manière à me déprécier, sans malveillance; mais il est ainsi, et il ne faut pas lui en vouloir. Je l'entends d'ici s'étonner et faire mon oraison funèbre. Si quelque obstacle venait de ce côté, il y aurait peut-être lieu à le prévenir. Ses paroles, si spirituelles d'ailleurs, n'ont plus cours sur la place ici. Mais j'espère qu'il arrivera à Lausanne trop tard pour influer en rien. (Correspondance Sainte-Beuve, introductions et notes de Léon Séché, Mercure de France, p. 37-38)

(5) Une bienveillance sérieuse m'y a pris au début et m'a soutenu jusqu'au terme. Je serais trop simple de sembler croire cette bienveillance tout à fait unanime; rien n'est unanime nulle part; mais il serait ingrat à moi de ne pas la croire générale. (Port-Royal, Pléiade, t. 1, p. 89)

(6) J'écris toutes mes leçons; et pourtant j'improvise, ou du moins je fais une demi-improvisation, en présence de mes papiers que je ne suis que pour le sens et le gros.

Comme pourtant tout est écrit, j'y gagne d'avance, sinon la rédaction définitive, du moins les matériaux de mon livre. (Lettres inédites de Sainte-Beuve à Collombet, publiées par C. Latreille et M. Roustan, p. 195.)

(7) Pour remplir les conditions de son programme, M. Sainte-Beuve délaye son sujet, le dissèque au microscope, le noie dans une foule de détails qui glissent sur la surface de l'esprit, fait des digressions peu concluantes, qui ne s'y rattachent point ou s'y rattachent mal. Plus haute était l'idée que nous nous faisions de M. Sainte-Beuve d'après ses ouvrages si remarquables, plus a été grand notre désappointement en le voyant débuter dans la chaire académique de telle façon qu'on est parfois tenté de se demander si l'on n'est pas en proie à un mauvais rêve, et s'il y a bien identité de personne entre le journaliste et le professeur. (Cité par G. Michaut, Sainte-Beuve avant les Lundis, p. 376)

(8) Vous avez un Louis d'or; vous me dites: Mettons nos louis d'or ensemble. Je sais que je n'ai pas un louis d'or, mais seulement une pièce de trois baches et je dis non. Vous vous attristez et vous blessez un peu. Je vous dis: Eh bien! mettons ensemble votre louis d'or et ma pièce de trois baches, si vous y consentez; j'apporterai moins que vous dans cette amitié; mais, du moins, j'y apporterai d'abord le contentement et le bonheur de recevoir plus que je ne donne, ce qui est un des caractères de la véritable amitié. (Cité par E. Rambert dans J. Olivier, op. cit., p. 106)

(9) Singulièrement réglé et ordonné dans son travail, faisant et observant strictement, chaque jour, la part du travail et des distractions, même du plaisir; tenace, obstiné, entêté même, emporté parfois; le front sous sa petite calotte de velours noir que plus tard il ne quittait guère, mais déjà beaucoup dégarni de cette forêt de cheveux roux que je lui avais vue en 1830 et qui existe encore dans son médaillon par le sculpteur David d'Angers, n'en étant pas plus beau (il ne l'était, ai-je dit, ni ne prétendit jamais l'être), mais la figure se dégageant mieux, prenant mieux son caractère définitif; les yeux très beaux, de regard surtout, quand ce regard vous y avait rendu attentif, et une grâce, une finesse, un attrait tout particulier dans le sourire; ce sourire, moins serré, moins sur ses gardes qu'il ne le devint plus tard, alors même qu'il semblait se laisser aller et se livrer davantage, ayant une pointe et un son de rire moins métalliques, étant peut-être moins fréquent et moins vif, mais plus ouvert, plus facile, venant plus du dedans . . . , (Juste Olivier, op. cit., p. 75-76)

(10) Je suis toujours attelé sans désemparer à mon labourage; je compte les sillons, ce que j'en ai fait et ce qui me reste à faire. (Lettre à Collombet, le 25 janvier 1838.)

(11) Je trvaille cette année à une histoire littéraire de Port-Royal. C'est un bien beau sujet, à la fois circonscrit et étendu, côtoyant tout le XVIIe siècle et le traversant, le formant maintes fois dans plus belle partie; d'admirables têtes: Pascal, Arnauld, Nicole, et tant d'autres, moins connus et bien attrayants, Lancelot, Hamon. Puissé-je ne pas trop rester au-dessous du sujet, et n'être pas trop distrait non plus, chemin faisant, par les inévitables accidents d'ici qui vous jettent de côté dans les travaux qu'on voudrait uniquement embrasser. (Lettre à Lamennais, datée du 14 décembre 1834.)

(12) Pour moi, cher ami, j'ai tout à fait embrassé l'étude et les saints solitaires de Port-Royal. C'est une Rome à ma portée, et je l'aime déjà autant que vous votre Vatican.

(Correspondance, t. 1, p. 29)

(13) Je m'occupe, en ce moment, d'une histoire littéraire de Port-Royal et des solitaires qui s'y rattachent; c'est une belle part de l'histoire littéraire du XVIIe siècle, la plus belle peut-être, en y faisant rentrer Racine, Despréaux même, Mme de Sévigné un peu, et en parlant, par occasion, de Bossuet et Fénelon, qui eurent des rapports, de contradiction, il est vrai, avec le jansénisme. J'espère, à la fin de l'année, être avancé dans ce travail, dont je suis pourtant trop souvent distrait par d'autres travaux. (Nouvelle correspondance, p. 27)

(14) Dans cette année, si je faisais un livre qui fût un témoignage pour lui et une pièce justificative devant son public universitaire, il verrait à me nommer, peut-être, sans doute . . . (Correspondance, t. 1, p. 23-25)

(15) Il y a des hommes qui ont l'imagination catholique (indépendamment du fond de la croyance): ainsi Chateaubriand, Fontanes; les pompes du culte, la solennité des fêtes, l'encens, tout cet ensemble les touche et les émeut. ——Il y en a d'autres qui (raisonnement à part) ont la sensibilité chrétienne, et je suis de ce nombre. Une vie sobre, un ciel voilé, quelque mortification dans les désirs, une habitude recueillie et solitaire, tout cela me pénètre, m'attendrit et m'incline insensiblement à croire. (Portraits littéraires, Garniers frères, t. 111, p. 543, Pensées,)